

東亜同文書院との私的出会いについて

—北米に於ける極東アジア学科とその資料

ミシガン大学名誉学芸司書 仁木 賢司

ただいまご紹介に与りました仁木でございます。プログラムにはカタカナでニキ・ケンジと書いてありますが、日本人ですので漢字がちゃんとございまして、「仁木賢司」と書きます。

愛知大学とはこれまで非常に密接な関係を保ちながら、2011年5月末日をもって、ミシガン大学をリタイアをいたしました。今はテキサス州州都であるオースティン市の南にあります小さな鄙びた田舎町に、家内と二人で住んでおります。リタイア以来、図書館とか資料とか、そういうものは、全く私の生活の中にはありませんでした。現在の生活の中心は、ハイビスカスをどのように育てるかとか、ブーゲンビリアを庭いっぱい育てるにはどうしたらいいとか。そして、このあたりはメキシコ系の方が多いものですから、食べられるサボテンはどれか、どんな種類なのかとか、どういうふうに着きんぐすればいいのかとか、そういうことにものすごく意識が集中しています。ところが突然、この8月に三好先生からインビテーションいただきました。私としては、もう2年前にリタイアしておりましたので、大変うれしかったのですが、この件についてどのように準備すればいいのか分からず、悶々としておりました。というのは、1年ほど前からもう左の眼が極端に悪くなりまして、今日も私のスピーチ用にこんな特大の資料を作っていただいております。皆さんのお手元にあるのと中味は同じなのですが、事務局の方のご助力を得て大きなものにして頂きました。私もレイノルズ先生の講義の様に、原稿を読み上げたいのですが、眼がこんな具合ですから座ったままでは読めません。こういう状態になってしまうと、私の生活の中に“読む”という行為がどれほど大切であったか、しみじみ思うようになっていきます。「読む」事は快楽なり」と自分を鼓舞して過ごした学生時代、そして仕事として資料の渉猟をした35年、この快楽から見放されてしまいました。でも1年ほど前からは、こんどは眼を使わずに耳で聞こうと、少しずつ訓練をしています。そして皆さんのおっしゃることをずっとこう聞いております。眼の悪い方っていうのは、子供の頃からであれば、皆さんこうやってコミュニケーションを構築していくんでしょうね。私は70過ぎてから、そんなことをやり始めたわけです。ですから、時に非常にストレスがたまることがあります。さて、前置きはそこまでと致しましょう。

東亜同文書院に出会うまで

私、今日はいろいろなことが頭の中に去来しております。東亜同文書院に拘わる愛知大学との関係、私が日本語資料の司書として生活した37年のアメリカでの生活、人生の半分以上をそこで過ごしたわけですし、その結果自分ではどうにもならない事実なのですが、日本的発想が変化してしまったり、私が使用する日本語自体がやはり少しおかしくなっている等に、それは表れております。さらに、今では思考や行動を構築する想像力がどんどん低下して、それに

対する焦りの様なものも感じるようになりました。

私が、なぜ東亜同文書院と関わり合いを持つに到ったかということが一番最初に述べたいと思います。

私は、ライブラリアンなどとは全く関係のない世界から、この世界に飛び込みました。というのは、私は上智大学文学部哲学科に在りまして、そこでスコラ哲学を4年間やっておりました。卒業後はやはり上智大学の神学部で学士入学し、そこに1年半おりましたが、そこを中途退学してしまいました。カトリックの司祭を目指して神学をやっていたのですが、途中で挫折というのか、追い出されたというのか、ともかくそこを出ることになってしまったのです。そうした傷心のまま、外国の大学の留学生奨学金テストを受けたら合格致しました。そこはメキシコ大学でした。1年間メキシコ政府の奨学金を戴き、スペイン語を学習いたしました。そして日本へ帰国する途中、ロサンジェルスに立ち寄り、4カ月間英語を勉強して帰国し、何の目的もないまま普通のビジネスマンになりました。そこで4年が過ぎたころ、上智でお世話になった先生を訪ねて行きました。どうにも、アカデミズムの世界への思いが断ち切れなかったのです。そうしましたら、先生は、もし私が勧めるところに行くならば推薦状を書いてよい、と仰いました。それは、一つはスペインのサラマンカ大学、もう一つはイリノイ大学。そしてもう一つが、上智のキャンパスの掲示板に載っていましたセント・ジョーンズ・ユニバーシティ・イン・ニューヨークでした。そのころ、私はもう成人して社会に出ておりましたし、しょっちゅうお酒を飲んでいた人間ですので、サラマンカなどというスペインの片田舎に行ってしまうと、授業料は只かも知れませんが、何の仕事もなさそうです。さあどうする、どうやって生活するか。貯金はすぐに底をついてしまうだろうし、これはだめだ。でも、本当に行きたかったのはサラマンカ大学でした。しかし先生は、イリノイ大学のマスターに入れと仰るのです。しかも、それはイベロ・アメリカ・スタディといって、スペイン語を主体にした勉強なんです。でも、私にとってイリノイとは、とんでもない田舎でした。イリノイ大学といえば、これは麦畑の中にあるんじゃないだろうかと思ってたんです。ですから私は、そんなところではとても生きていけないと、大げさですが真剣に悩みました。その結果、やはり赤提灯の灯がちらちらとあって、繁華街があつて、摩天楼があつてということで、ニューヨークを選んだのです。私はニューヨークのセント・ジョーンズ・ユニバーシティのアジア学の方に、全くもう無目的で奨学金を頂戴し、どんな大学かもよく知らずに行きました。結果的には、それは俗に言うエイジアン・スタディーズ、アジア学の大学院に入ったわけでした。

セント・ジョーンズでは、周りには日本人は居ません。そして、耳にするのは中国語なのです。結局、後から分かったことですが、その中国語を話す学生さんたちは、みな台湾からの国民党推薦の学生さんでした。その頃、要するに留学生というのは、台湾からしか受け入れられていなかったのです。中華人民共和国からの留学生は、1977年当時のアメリカには希有な存在であつたと思います。従って、まるで呼吸するように自然に台湾の国民党からの学生さんたちと一緒に政治の世界の中を生きていたように思います。とはいえ、彼らはとても親切で、私はずいぶんと楽しい思いをしました。そして、1年半で修士学位を取りました。考えてみますと、その時に生まれて始めて東洋を勉強しようということを決心したのですが、その理由というのは、自分自身がカトリックの家庭に生まれ、カトリックとして育ち、そして上智大学の文学部

哲学科でスコラ哲学を4年間学んで卒業したこと、そしてラテン語を中心に勉強して、神学に入るというお決まりのコースをたどってきたのですが、それら全てがヨーロッパ主体の勉強だったことにあるようです。その時点で、私は最終的に何か欠けてると思わずにはいられません。では、何が欠けてるのか。それはやはり、自分も日本人であって、儒教の影響を受けた、あるいは仏教の影響を受けた、あるいは神道イズムの影響を受けて、成長してきたのではないかと。物事を判断するときに、それらから受ける意識無意識での支配を跳ねのけることは決してできないのではないかと。それなら、どうしたらいいのか。ということに思い至った訳です。自分はこの西洋古典古代風な、ヘレニズム的な世界から飛び出して、東洋を勉強した方がよいのではないかと、というふうに自分で得心した訳です。そこで、セント・ジョーンズのエイジアン・スタディのコースに足を踏み入れたのですが、内心ではどうしても哲学を続けて、早くこの修士課程を了えて、できればPh.D.に入りたいと思いました。ところがどうしたことか、そのPh.D.に入る前に生活費が無くなってしまいました。奨学生ですので授業料は不要なのですが、生きるためにいろんなことをやりました。家庭教師の外にも日本語補習校の教師を5年、そして、最終的に図書館長に呼ばれました。生活の基盤を作ることが第一でその後、Ph.D.に行きなさい、との助言を戴きました。そこで私は、ライブラリ・スクールに入りました。ライブラリスクールは、日本とアメリカとは全く違います。アメリカでは、どのような形で、ライブラリアンとして就職するには資格が必要です。その資格とは、Master of Library Scienceの修士号なのです。それがなければ、ライブラリアンにはなりません。それ以上にPh.D.を持った人がたくさんその分野に入って来ます。そして彼らはそれに加えて修士学位でもLibrary Scienceを持っています。私はそれを取得した後、ほぼ同時にグリーンカードを取りました。そしてコロンビア大学にCataroguer(分類官)として、入ったという訳です。

その後、私を厳しく訓練してくれました日本人の女性の方が上の方に異動になりまして、私を自分の後釜に据えて、Curator of Japanese Collectionというキュレーターの仕事を与えてくれた訳です。そこで勢い、私は自分の仕事の範疇が、機械的に分類をするところからレファレンス、参考文献資料、そして、その学部・学科とのコンタクトという形に移り変わったのです。そして同時に、コレクション(資料)を自分が選んでいくという形になりました。

ここで、当時の全米の東アジア・コレクションとは一体どう言ったものだったのか、説明しておきましょう。アメリカでは、東海岸のアイビーリーグを中心とした諸大学、主にハーヴァード・イエール・コロンビア・プリンストン・コーネルならびに首都ワシントンD.C.にあります米国議会図書館(Library of Congress)等が日本語・中国語・朝鮮語の資料を収集をしていました。そしてそれぞれの大学がおおざっぱに言って、年平均30万ドルを下らない資金をそれに投入していました。私も一人で3500万円を日本語書籍の購入に充てていました。1985年当時、私が1年間に買った日本語の本のお金は30万ドルです。これは日本ではとても考えられないくらい巨大なものです。私はそのようにして資料収集を専門にやり始めました。しかし頭の中では、自分がマスターを取った時にとても楽しい思いをした中国の勉強をどうしても、忘れることはできませんでした。それと同時に、どうして日本語資料は日本に関するものだけ、中国語は中国に関するものだけを収集するのだろうか、といつも思っていました。

コロンビア大学のイーストエイジアン・ライブラリでは、私が日本語文献の収集レファレン

スをやリ、その他に日本語資料を分類する人、またそれに先立つ段階でスタッフとして普通の事務官としての仕事をする人と5人くらいの日本人の職員がおります。それが中国になると6人〜7人いるのです。そして、韓国は2人くらいはいます。学生の補助もつきます。ということは、アジア関係の一か所だけで職員が最低で23名。ハーバード大学はアジア関係だけで45名のフルタイムの職員を抱えているのです。これには、本当にどうやってその財源を確保しているのだろうかと思えるほど不思議でした。

私は小さな学校のアジア学を出たのですが、どう考えても、実際に中国の人たちと触れ合っ
て肌で感じたものこそ、歴史の学問研究に必要なのではないかと考えていました。大学院では私は中国現代史を主にやったのですが、そのときに東亜同文書院という貴重な存在を知りました。それ以来、限られた資料で自分なりに渉猟し始め、同文書院のその存在なしには中国近現代史、ことに日中関係の歴史は考えられないのではないかと考える様になりました。コロンビアに転職してその書庫で、東亜同文書院の古い書物を目にしたのですが、ほんの少ししかありませんでした。そうした時に、一度でいいから行ってみたいと思ったのがこの愛知大学なんです。それで私は時間を作って、日本に來られたならば何とかして豊橋に立ち寄りたいものだと思うようになりました。

9年半、コロンビア大学に勤めました。それで最終にもう一度、母校セント・ジョーンズ大学にコレクションのヘッドとして帰りました。中国・日本・韓国のヘッドとして私が帰り、専門書を買いはじめたときに、予算の何と少なかったことか。ほとんどの資金を中国語で書かれたものに充てるしか方法がありませんでした。セント・ジョーンズ大学のアジア学部は、中国系の学生が主流でしたから、そうせざるを得なかったのです。日本のものは高過ぎました。それは、大きな組織の大学と小さな組織の違いという、大学の悲しい現実なんです。そこで7年私は過
ぎして、テニユアを取りました。アソシエイト・プロフェッサーとしてのテニユアで、日本語と日本文化に関する大学院の夜間の授業を担当しました。それは全く大学図書館とは無関係に頼まれたものでした。その後ミシガン大学から招聘され、そこに異動して約11年仕事をして、リタイアしたという訳です。

アメリカの中国研究と私

これが私の経歴です。私の頭の中にはヨーロッパ文化とアジア文化がやはり混ざっています。ですから、非常に変な人間ではないかと自分では感じています。ともあれ、東亜同文書院関係の資料収集に本格的に取り組み始めたのは、ミシガン大学に移ってからのことです。私は、初めてここへお邪魔しまして、あの古い建物の中にあります記念館の展示を見たとき、私は本当に度胆を抜かれました。というのは、孫文とか孫文に関わる宮崎滔天とか、そういった人たちの揮毫やら作品・資料などが、まるで当たり前のように置かれているではありませんか。これには随分と驚きました。そこで、私はそのことを藤田先生にお訊ねしました。こういったものがここにあるということ、例えば台湾の国民党の人たちはご存じなんでしょうか、と。すると、さあどうでしょうか、と仰ったのです。私は、それまでに台湾の国民党のことを調べて來ましたから、そんなことはなかろうと思ったのです。ミシガン大学では、中国研究センターや日本研究センターはかなり大規模なものです。そういうところに集まってくる東洋人は、中国

系の人が一番多いのです。それで、あなたたち中国大陆から来た人は国民党の資料についてどのように考えているのかと聞くと、そんなものはとくに全部研究済みだというのです。私はそんな言い方は、本当に無知の為せる業だ、日本にはもっとたくさん国民党関係の資料があるし、最も鍵になるものもあるというようなことを、しばしば説明するようになりました。

そういう形で私は、東亜同文書院と関わりを持つようになり、愛知大学の図書館に邪魔して、その東亜同文書院の大旅行史とか、雑誌の束とかを目の当たりにして、何とすごい知の集積なんだろうと思うようになりました。そのため、この東亜同文書院の存在を知ったおかげで、Curator of Japanese Collection という、日本キュレーターの名前で働きながら、日本と中国との関係史を見渡し、私の予算で買えるのものは積極的に収集し、予算の制約がきつい場合は、日本財団が北アメリカで展開している Association for Asian Studies 向けに作り上げた一つのプロジェクトの中にある全巻セット購入の場合のみの補助金プロジェクト、1セットが数十万円から数百万円する資料の購入に際しての補助金獲得の申請書を提出し、委員会の賛同が得られた場合、全額もしくは部分的な補助金が得られる基金がありますが、それを利用しました。そうやって東亜同文書院に関しての資料やマイクロ資料を収集しました。その時、他の大学からも同じ資料購入の希望が出される場合があります。そうなるとコンペです。ハーバードやシカゴ、イェールとかの人たちと争いながら、とにかく私のところで研究すればいろんな他のものも見られるのだから、研究したい人はここへ来ればいいじゃないか、というようにして、どんどん同文書院関連の資料を集めました。当時、あと一歩というところで、UCLA に1つ持っていかれたことがあります。でも、私の頭の中にはどんな場合であれ、東亜同文書院の膨大な知の集積が全米中に1つあるいは2つあれば、皆さんがそれを使えばよいのだ、と考えるようになりました。

私はライブラリアンとしてコロンビアで鍛えられた時に、それこそレイノルズ先生が仰った、“Think out of box” というその考え方を植え付けられたのです。それはどういうことかといえば、もはやコロンビアのライブラリーだとかミシガン大学のライブラリーだとか、そんなことを考えるような時代ではない。これからはアメリカ合衆国そのものを、一つの書庫だと思えということです。これは我ながら、非常に大きな衝撃でした。そこで、私はそれを心に決めました。どれほど高価なものでも、1つでもこの全米中にあれば、それを使うことはできるのではないか。例えば、システムの中には Inter Library loan というのがあります。他大学などに依頼すれば、その文献を送ってくれるということです。例えばコロンビアから送ってほしいと言われれば、それを送ります。そして、ちゃんと責任持って返却するというシステムです。ですから、各大学の書庫には限界がありますが、全米を一つの書庫として考えれば、これこそ本当のグローバリゼーションの知の共用になるわけです。そういう意味で、私は東亜同文書院と対しました。でも私は「教える」という立場ではなく、そうした人たちをサポートをしていくことが任務です。知識は研究者とは異なり、「広く浅く」が求められます。従いまして、東亜同文書院ものはこれ、その他に南方熊楠のものはこれというようにして、自分ができる時間内にやれるのは、本当に限られた範囲でしかありません。それを一生懸命に37年間やってきた訳です。ですから、私のようなアウトローみたいな者がここに招かれるというのは、身に余る名誉、過ぎたる栄誉と感じております。

さて、ここまではあくまでも東亜同文書院に関して述べて参りましたが、ここでアメリカ全体のアジア学に関する状況に触れておきたいと思います。その中でも日本学についてお話ししたいと思います。なぜかと申しますと、先程レイノルズ先生が仰った、エリアスタディ、つまり地域研究の中で日本研究がどこから始まってきたか、ということです。一番最初に日本学に特化した研究センターを設けたのは、ミシガン大学です。その次にハーヴァード大学が日本研究センターを作り、次いでコロンビアが設置しました。従って、このミシガン大学の Center for Japanese Studies は、すでに 60 年以上の歴史を刻んでいることになります。私はそのセンターに属している教授の皆さんあるいは大学院生の皆さんと、常にコンタクトを取りながら、資料収集の仕事をやったりリファレンスの仕事をやったりしてまいりました。1930 年代に、すでに日本語・日本研究センターができていたのです。それでは、なぜ第二次大戦前にそんなものができたのでしょうか。そこにはアメリカの非常に大きな深謀遠慮がありました。日本と戦争をすると決めたと時に、アメリカ政府は 2 つの日本語学校を設置しました。一つはカリフォルニアのモンレーに置かれた海軍の日本語学校です。そこは大変有名なところで、今をときめくアメリカ人の日本学研究者の多くはそこで訓練を受けた卒業生です。例えば、先頃、日本に帰化されたドナルド・キーンや、すでに亡くなられたサイデンステッカーがおります。このお二人は日本文学研究の巨匠です。その他に政治学のジェイムス・モーレイ、中国に専門を移したテオドル・ド・バリイ。そうした人たちはみんな同時期にコロンビアで日本語を勉強して、それからその秘密の学校に送られたわけです。カリフォルニアで、さらに日本語をやるんです。その後輩にあたるのがジェラルド・カーティスとかヘレン・スミス、キャロル・グラッグなど、そういう人たちがもうわんさわんとコロンビアにひしめくことになります。ですから、日本研究の拠点はコロンビア大学だと思います。そこには、莫大な資力を背景に本当にいいものを世に送り出そうとする姿勢がありました。ミシガン大学は、一応ミシガン州立ですの州の予算で運営されている公立の大学です。資力はありますが、先生たちはまだまだ若い方が多い時代でした。そして、海軍の日本語学校出身者が戦後に学問の世界に入り、一流になられた訳です。一方、陸軍も日本語学校を設けましたが、それはミシガン大学の中に置かれました。ミシガン州のアン・アーバー市です。そのような形で、アメリカには 2 つの秘密の日本語学校が戦前から運営されていました。私が奉職しましたミシガン大学の昔の姿は、その一部は秘密裏に陸軍の日本語学校だったということです。ですから、1930 年代の Ann Arbor Clonicle とか Ann Arbor News をデジタル化された資料で見えますと、当時どのように日本語が教えられていたのか、手に取るように分かるんです。その後、アメリカ政府は、アン・アーバーという小さな町で日本語の使用を禁止しました。ミシガン大学の卒業生はフォードやクライスラーといった巨大な企業があるデトロイトに隣接していますので、戦後はそういうところの幹部になっていったと言うケースが多い様です。そうしたものがアジア学の中での日本学の基礎として考えられると思います。

こうした問題に関しては、他にもハーヴァード学派などについて全部述べなくては行けませんけど、時間の都合でとてもそんな余裕はありません。残念ながら話を先に進めたいと思います。私がこの東亜同文書院、そして愛知大学とこのような関係を持つようになりましてから、多くの機会を藤田先生から頂きました。従いまして、皆さんにお目にかかる機会も非常に

多くありましたので、いろいろと考えるチャンスを得ました。先程からずっと聞いていますと、東亜同文書院の建学の精神は、これは日本では古来流れて来ている政治の世界の中から見れば、やはり“Think out of the box”によって困難な中におかれている中国の復興に寄与する事がまず第一義だったと考えて差し支えないのではないかと思います。もしそういう意味で Institution を築き上げたならば、それが“Out of the box”だったということではないでしょうか。それならば、東亜同文書院と現在の愛知大学はどうなるのだろうか。この点では、私は確信を持っております。愛知大学は知の集積を持っているのです。それは同文書院の大旅行誌、様々なデータベース、支那省別全誌のデジタル化された全文データ、その他に東亜同文書院に関わる雑誌記事のデータベース等等。これらを、内部に納めているだけではないけません。海外では、貴重そのものです。言いたいことは、今こそ box を飛び出して欲しい、ということです。これだけの素晴らしいものを作り上げた人がいたのに、どうして「押収物」のように内部に置いておかななくてはならないのでしょうか。みんなで共用しなくてはならないものではないか、と私は思います。ですから、今日のお話のまとめとしては、資料の公開をこれからの構想として愛知大学に、東亜同文書院大学の後継大学として、世界中に知の電波を送って戴きたいものだと考えて落ちます。

【質疑応答】

A：仁木先生、お話ありがとうございました。合衆国を一つの書庫だと思えというお言葉、印象に残りました。我々歴史家は、資料があるところに行き、そこでものを見て、やっと分かるのです。そういう意味でライブラリアンという仕事が非常に重要な仕事であることが分かります。

B：仁木先生、どうもありがとうございました。先程、台湾の国民党がアメリカでは現在さほど重視されていないというお話でした。実は台湾には国民党の党史会や中央研究院近代史研究所などがあり、国民党に関することは当然ながら非常によくご存じです。それから台湾の国父記念館、つまり孫文記念館では全世界の孫文関係の記念館についての簡明な紹介パンフレットを作っています。その中には日本にあるものについても記述されておりますが、その中には神戸の孫中山記念館があります。それから、大陸の方でも歴史研究者は国民党について大体よく知っております。ここで一つ質問があります。ハーヴァード大学のエズラ・ヴォーゲル先生についてです。2004年に行われたヨーロッパ・アメリカ・中国・台湾・日本の研究者による日中戦争のシンポジウム、軍事関係のシンポジウムがありました。その時、エズラ・ヴォーゲル先生は、最初のごあいさつを3回やられました。英語と中国語と日本語です。そして、大学では日本語だけで教えているということでした。そこで日本語については、エズラ・ヴォーゲル先生がどこで日本語を学ばれたのか、お教え頂けると幸いです。

仁木：エズラ・ヴォーゲル先生には私もお目にかかってお話ししたことがあります。しかし、エズラ・ヴォーゲル先生が日本語をどこで勉強なさったのかについては、私はちょっと記憶にありません。もしも海軍の方で日本語を習われたのなら、これはもう簡単に進めたと思います。陸軍の方の場合ですと、ミシガン大学の Center for Japanese Studies の基礎を作られた方は、日本と全く関係のない地理学のロバート・バーネット・ホール先生でした。非常に有名な地理

学の先生でした。その地理学の先生が、いずれこの地理学というのは、各地域に各地方にに実際に行って、そういうところで勉強してかなければいけないのだというようなことを仰っていました。戦後その考えが実を結び、初めは全く日本と関係なかったその先生が、日本にミシガン大学の学部を作ってしまった。それが岡山県なのです。岡山市に、戦後すぐミシガン大学の Center for Japanese Studies のオフィスを置き、そこに学生をアメリカから派遣しました。そして、そこに住んで日本全国を回ったのです。もうまさに東亜同文書院の「大旅行」のような形でした。地理や産業、文化について、直に日本人と一緒に日本語で付き合い、勉強するというものでした。これはミシガン大学岡山分校といいました。これは 1947 年に設置され、岡山には 1950 年に現地分室が開かれ、1955 年まで存続していました。岡山県知事と交渉して、岡山市の中にその学校を建て、学生を育てていったのです。その学生はやはり日本語が大変上手で、卒業後は、学問の方の世界に入った方が多くいます。私がセント・ジョーンズに居たときに、歴史の先生で来られた先生も、そこで日本語を勉強したということでした。エズラ・ヴォーゲル先生はハーヴァードですし、もともとハーヴァードはフレンチ・ロシア学派の影響を受けた東洋学の場所です。ですから、エズラ・ヴォーゲル先生に関しては、今の所、お答えできかねます。しかし、必ず調べますので、お許してください。